

- ・藤原道長の実像
- ・美しい仮説と  
醜い事実
- ・絶望の拳
- ・コミックベスト3

## 実際は少し照れながら

## 詠んだのかも

好きな作家の一人、永井路子さんの訃報を聞いた時、もう新刊を読むことはない寂しい気持ちになりました。次の大河ドラマ「光る君へ」と描かれる時代が同じということ、手元にはない著者の『この世をば』が新たに出来ないかと思っていたところ、朝日文庫から刊行され、今年後半で一番の本に出会えました。

主人公の藤原道長に対するイメージは一族が栄華を極め、朝廷に君臨した権力者です。そのため「この世をば」で始まる句は傲慢な権力者が得意満面に詠んだものと想像していました。

しかしこの物語で描かれる道長は名門の家柄ながら、権力闘争の厳しい政治を渡る兄たちに比べ出世欲があまりなくどこか頼りない人です。それが二人の兄が急逝、娘が帝の妃となり皇子が生まれるという偶然が幸運となり、己の欲に気づきトップにのぼり詰めます。「何たること、何たること」が口癖で困ったり、迷ったり、権力



かれるところが面白いです。また宮廷の権力闘争といえ男性だけでなく、その裏で天皇の母である道長の姉や、中宮になった娘など女性達が大きく関わっているところも興味深いです。

上・下巻の長編ですが登場人物の会話も現代寄りで大変読みやすいです。四〇年前に出版されたこの物語にまた光が当たればよいなと思います。

## アジア

## 発酵街道を

ゆく

「発酵デザイナー」小倉ヒラクさんの新著『アジア発酵紀行』は、日本の発酵文化のルーツを求めてアジア辺境を旅する壮大なノンフィクション。「糀」は、麦が原料の「麴」ではなく、甘酒や味噌をつくる、カビを使った米の発酵の素である。そのルーツは遠く大陸の奥地にあるという仮説を確かめるべく、旅はチベット世界の入り口、シャングリラから始まる。

第一部では、中国雲南省の西部を横断する古の交易ルート「茶葉古道」を辿る。その昔、ミャンマー国境近くの熱帯からチベットのラサへと抜ける、急峻な尾根の崖沿いの道を、文化も風習も違うキャラバン隊がバトンリレーしながら茶葉を運んだ。三〇〇〇kmに及ぶ旅で微生物が発酵。お茶は驚異のスーパーフードに進化していく。

第二部では、さらに「糀」の本丸に迫るため、インドの東の果てを目指す。ネパールでブッダの末裔たちから精進発酵文化を学び、内戦地帯を抜け、ついにアジア最古の糀文化にたどり着く。予想外

結末はなんだか感動的で胸が熱くなった。

発酵文化は土地の風土と歴史だけでなく、信仰とも深く結びついている。まさに命がけ、食べて飲んで発酵文化を味わい尽くす著者の飽くなき探求心に圧倒される。本書を今年のエンタメ・ノンフィクション、ベスト1に挙げたい。



## おすすめした小説

文芸書で読み応えがあった作品三点を紹介します。

『極楽征夷大將軍』は今年七月に直木賞に選ばれました。鎌倉幕府滅亡から南北朝まで、今まで本を読んでもよく分からず、動乱なのに面白くないってどういうことなのかと思っていたが、今回足利尊氏・足利直義・高師直の人となり初めて形になって「なるほどなあ」と納得。分厚い本ですが歴史好きにはおすすめ。

『踏切の幽霊』は幽霊が出てくる（心霊現象も霊媒師も出てくる）のにホラー感が無く、ちゃん

とミステリに仕上がっているのがすごい！偽名で生きてきた一人の女性が非業の死を遂げ、その幽霊を目撃した新聞記者が彼女の本名と正体を明かすために奔走します。心情に迫るものがある良作です。

『歌われなかった海賊へ』はナチス時代のドイツが舞台。抑圧的なナチスに反抗し自由を求める少年少女たちがホロコーストを知って起こす行動とは…思春期特有のキラキラした冒険とその結末、冒険仲間に入ることができなかった語り手、卑怯な大人…それは現代にも繋がっており、考えさせられることが多い作品です。



## 美しい仮説と

### 醜い事実

〈進化論〉と〈地動説〉は、人類が神々のくびきから逃れた二大学説として私の中に並び立っている。しかし〈進化論〉は実験や観察で証明するのが非常に難しい。その所為なのか、誤用というか生物学をかじっている人たちがモヤモヤする使い方が散見される。例えば「適者生存に則り、企業活動に進化を促す」といったスローガンなどが代表的だ。このような〈進化論〉の使われ方を「呪い」と評し、その歴史をさかのぼって解説せんとするのが『ダーウィンの呪い』の趣旨である。

著者によると、〈進化論〉は三つの呪いを生んだという。進化が進歩の意味で使われる「進化の呪い」、努力して闘い、適者となって生き残れという「闘争の呪い」、〈進化論〉は人間社会をも支配する世界の基本原則だから、不満を言ったり逆らったりしても無駄という「ダーウィンの呪い」である。この呪いがどのようなものか、自身が呪われているか否か気になった方は、ぜひ手に取っていただきたい。

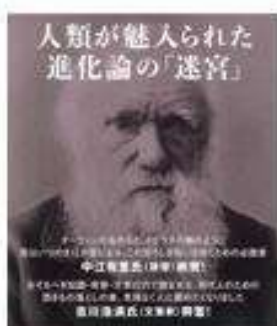
だが私の場合、むしろ自身の知識が打ち壊される感触に読む手が止まらなくなった。例えば「進化の呪い」である。「進化」という概念

はダーウィンの『種の起源』とともに誕生したというイメージが漠然とあったのだが、「進化」を意味する Evolution はそれ以前から存在していた。そして当時は「進歩」の意味（指向性を持った変化）であつたという。つまり、私が誤用だと思っていた使い方が本来の使い方だったわけだ。そして、進化には指向性があるのかランダムなのかを決定づけるのに長い論争と数多の実験が必要だった。「闘争の呪い」「ダーウィンの呪い」についても同様で、その呪いの起源や論争についても丁寧に描かれる。呪いの原因に、あるいは誤用と

思っていた表現こそ真実かもしれない可能性に戦慄した。それらは差別を助長したり、道徳や倫理をも遺伝で片付けられたりしてしまうかもしれないのである。

読んでみると、世間にかかった呪いを解くつもりが、実は自身こそ呪われていたという事実に愕然とした。そういうわけで、今年一番衝撃を受けた理学書として本書を挙げたいのである。

ダーウィンの呪い  
千葉聡



## 熊に注意

今年気になったニュースで、夏ごろから熊の目撃情報や被害情報が県内だけではなく全国的に目にするようになった。猛暑や降水量不足による、熊の食料となる植物の不作が影響とのことらしい。自身の活動圏内に近い場所を目撃情報などが報じられると、怖い、と感じてしまう。

今回紹介する『ある日、森の中でクマさんのウンコに出会ったら』という書籍は、ツキノワグマの生態を研究している大学教授が書いた本である。森の中に落ちている熊の糞を採集して、生態や森の植生への影響などを調べられていて、調査中に熊に襲われた体験談なども書かれている。この本は、日常で熊に襲われたらどうするか、というような内容ではないが、生態や習性などの正しい知識を持つことによって、少しでも突然の事態に対応できるようにになれるかもしれない。と、堅い紹介の仕方をしてしまったが、熊の糞を二十年以上も追いかけた著者の半生をとっても面白く読める内容でもある。著者も本の中で語られているが、生態を把握することで、人も熊もなるべく干渉しないですみ分けできるように山林の管理など地道な積み重ねが大切なのだろう。

## 過去でもなく

### 未来でもなく

#### いまここ

著者はタイやラオスの山岳地帯に住む五百名余りの狩猟採集民族ムラブリの言葉を研究している言語学者で、富山大学文学部卒、富山国際大学の講師もされていた方。

ムラブリ語には文字もなく暦もない。曜日はなく、月はあるが、一ヶ月も人によって異なる。年齢も分からない。季節や子供、大人の区別はある。

過去と未来が一緒に、つまり、いま現在か、そうでないかの違いがなく、明日会う約束をしようとしても、「イオーイ（わからない）」としか返ってこない。

必要なものは森で現地調達し分業もしない。意見が違っても、ある意味徹底した個人主義（カラム ドウ モイ（そいつ次第だ））が、冷たいとかそうでもなく、助けを求めればできる限りのことはする。

著者がムラブリ語を習得し、一緒に生活し少しずつムラブリっぽくなっていくのに対し、ムラブリも定住化や換金作物の栽培の手伝いなどを通して、変わってきている現状も出てくる。フィールド言語学の入門書としても最適だ。

普段、カレンダーと時計に縛られる生活が大半で過去と未来ばかりに追われ、「いま」を蔑ろにした日々を送っている自分に刺さる一冊だった。



## 塩田武士の傑作

映画化された『罪の声』や『騙し絵の牙』の原作者である実力作家、塩田武士。彼が、今持っている力の限りを尽くしたという力作が、『存在のすべてを』（朝日新聞出版）です。

優しさと切なさの詰まっている、美しい作品です。書影の美術作品からしてとても美しいです。加えて、ミステリ作品でありながら、主要登場人物である新聞記者が事件の背景・真相に迫っていく様子は、骨太な社会派作品という趣もあります。

「これぞ、自分の代表作だ！」という作者の強い思いと、朝日新聞出版の力の入れ様のあらわれなのでしょう。小説には珍しく公式ウェブサイトがオープンしています。ネットで検索するとすぐに辿りつけます。舞台になった場



所の取材写真や、作者自身による作品解説動画がアップされています。少しでも興味を持たれている方は是非ご覧になることをお勧めします。既に読み終えたという方も、覗いてみると作品がさらに好きになるはずです。ネタバレは困るので、一つだけコメントすれば、作者が読者に一番伝ええたかったのは、「写真絵画のリアルで美しい世界」だったのかな？ということですが、

なお、読み終えてから知りましたが、二〇二三年五月に休刊した「週刊朝日」の最後の連載作品となったということも紹介したいところです。日本最古の総合週刊誌として歴史に名を残した雑誌の最後を飾った作品だったのかと振り返ると、何とも言えぬ感慨深さがあります。

## 絶望の拳

スポーツノンフィクションの走りといえば「江夏の21球」がある。『Sports Graphic Number』創刊号に掲載された短編は、一九七九年十一月四日の日本シリーズ第七戦で、江夏豊が九回裏に投げた全21球に焦点を当てる。現在ではスポーツノンフィクションのバイブルとなっている。

若かりし頃『ボクシング・マガジン』を読みふけり、後樂園ホールでアルバイトをしていた著者が描く

『怪物と出会った日』はボクシングノンフィクションのバイブルになるかもしれない。副題は「井上尚弥と闘うということ」。井上と闘った者たちが何を考え、どのような思いでいたのかが明かされる。

井上尚弥がプロ三戦目で闘った佐野友樹の言葉が印象深い。

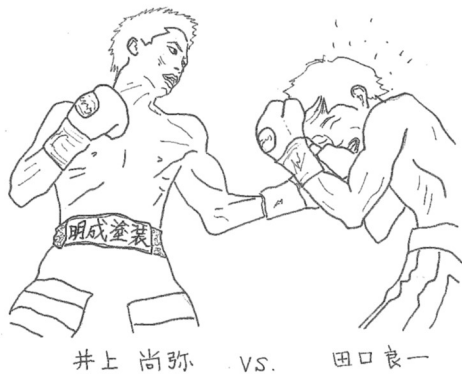
「みんな、井上と闘うなら今しかない」  
試合後、記者からの問いかけに答えている。佐野には未来が見えたのだろう。まだ荒削りだった井上が「モンスター」になるということが佐野だけにはわかっていた。井上と拳を交えたものだけが確信をもったのだ。その後、井上がモンスターと呼ばれるようになるのは、プロ八戦目後のことである。

井上のプロ四戦目の相手だった田口良一。井上戦後、WBA世界ライトフライ級王者に輝いている。井上は四階級で二十五戦を刻んでいるが、ダウンを喫しなかったのは田口のみ。元世界チャンピオンと言くと驚かれるが、井上尚弥と闘ったと語るとチャンピオンになったこと以上に驚嘆されるという。

井上と闘った十人が異口同音に語るのには、井上の拳の重さだ。今まで出会ったことのない拳の衝撃に戦意を喪失したと語る者もいる。上戦を最後に引退した者もいれば、敗北を糧に高みを目指した者もいる。けれども、井上と闘ったこ

とを後悔している者は一人もいない。ボクサーである以上、井上と闘わねばならないという思いは十人すべてに共通する。

一ラウンド三分、最大でも一二ラウンド三六分間という短い時間。冗長な話ほど興醒めするものはない。短い事象をいかに濃密に表現するか。名スポーツノンフィクションここにありという読後感だ。



## 困難で

## 興味深いこと

「スーツケースにキャスターがつくのに五千年かかったのはなぜか？」という誘い文句にまんまと誘われて読んだ本が面白かった。

古代においてスーツケースを持つて旅行するのは富裕層で荷物を運ぶのは使用人や奴隷だった。近

代になっても仕事で遠出するのは男性に限定されており、男なら持つて歩けるよね？という常識があった。スーツケースにコロコロをつけるアイデアはあったが実用化しなかった、女性が単独で旅行するようになるまでは。女性が一人で長距離移動する時代が来るとは、思いもよらないことだったらしい。

自動車のエンジンのスターターに電気を使う装置が考案されたきっかけとなる事故もあった。経済は合理性以外のきっかけで動いているかもという内容が続く。

男性はスーツケースを抱えて歩き、女性は一人で旅行しないというダイヤモンドのように硬い常識はいつしか変わった。女性の一人旅という現実を前にして、スーツケースにコロコロがついたように、これまでの経済で無視されてきた数々のアイデアの話には現実が常識を上書きする経済現象が綴られていく。あるいは上書き前の現象にも言及がある。ビジネスモデルの歴史も見せてくれ、世の中が変わるきっかけをいろいろ読ませてくれ、未来への予感を感じさせてくれた。

読書中に、思い出したことがある。オバマVSヒラリー・クリントンの大統領選挙時に米国中西部の男性がテレビのインタビューに答えた言葉「女を大統領にするくら

いなら黒人のほうがいい」。長い時間をかければ、あの男性の一般常識も変わるのだろうか？



## マイイチオシ三冊

### 『鵠の碑』

実に十七年ぶりとなる『百鬼夜行』シリーズの長編小説。ノベルスでありながら今回も期待？を裏切らない分厚さ。読むのも一苦労と思いきや、あつと言う間に物語の世界に引きずり込まれてしまう。圧巻の一冊。



### 『さみしい夜にはペンを持て』

著者は、ロングセラー「嫌われない勇氣」の古賀史健。いじめられっ子のタコの中学生に、ヤドカリのおじさんが日記を書くこと指南。  
「書くってね、自分と対話することなんだよ」



この一文に勇気と優しさが詰まっていると感じた一冊。



『続窓ぎわのトットちゃん』

前作から四十二年。本作は東京大空襲以後、様々な困難に直面しながら、ちよつとずつ大人になっていく成長物語。愉快、痛快、でも時々しんみり。愛おしさがあふれ出す一冊。

⑧

## コミックベスト3

今年読んだ中で個人的に印象に残ったコミックベスト3を紹介したいと思います。

1位は週刊少年ジャンプで連載中の『鶴の陰陽師』。高校入学初日に主人公が鶴という「幻妖」に出会うことから始まる現代陰陽師譚。新人作家のよくあるバトル物かと思いきや、一話目からモブキヤラがブリーフ一丁で主人公を守ろうとする姿が描かれるなど、著者の独特なセンスに驚かされました。人を選ぶ作品だと感じましたが、著者が富山出身だと知り、さらに応援したい気持ちが高まった作品です。

2位は『令和のダラさん』とある山村に封印されていた屋跨斑（やまたぎまだら）と近くに住む姉弟が出会うことから始まる物語。多腕で女性の姿をした半人半蛇の怪異ですが、奔放な姉弟に出会い「ダラさん」と呼ばれ慕われていく様子が面白いです。最初はシリ阿斯な作品と思われましたが、今まで見たことがないオカルトコメディに仕上がっていることに関心した作品です。

3位はモーニングで連載中の『今日もベランダで』。フリーのデザイナーで、癒しを求めてベランダガーデニングにハマった土岐田旬が主人公。ある日隣に引っ越してきた女性と、お互い顔も知らぬままベランダの隔壁越しに交流が深まっていくという作品。主人公とヒロインがまったりとしており、個人的にとっても癒された作品です。

二十年くらいジャンプを読んでいるとこれは自分にとっても刺さる

弟が出会うことから始まる物語。多腕で女性の姿をした半人半蛇の怪異ですが、奔放な姉弟に出会い「ダラさん」と呼ばれ慕われていく様子が面白いです。最初はシリ阿斯な作品と思われましたが、今まで見たことがないオカルトコメディに仕上がっていることに関心した作品です。

3位はモーニングで連載中の『今日もベランダで』。フリーのデザイナーで、癒しを求めてベランダガーデニングにハマった土岐田旬が主人公。ある日隣に引っ越してきた女性と、お互い顔も知らぬままベランダの隔壁越しに交流が深まっていくという作品。主人公とヒロインがまったりとしており、個人的にとっても癒された作品です。

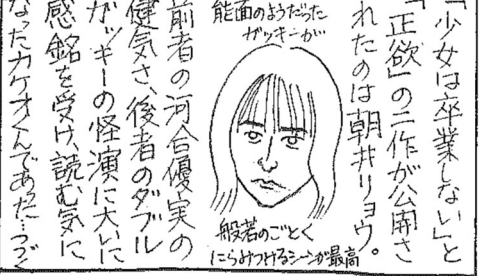
二十年くらいジャンプを読んでいるとこれは自分にとっても刺さる



オリジナルもいけれど原作ありの映画にも様々なよさがある。なよさがある。under current 本は優作だ！



原作の設定を借りて大胆に換骨奪胎したのは「正欲」の二作が公開されたのは朝井リョウ。『少女は卒業しない』と『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。『少女は卒業しない』は朝井リョウの代表作。『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。



『少女は卒業しない』と『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。『少女は卒業しない』は朝井リョウの代表作。『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。

『少女は卒業しない』と『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。『少女は卒業しない』は朝井リョウの代表作。『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。

『少女は卒業しない』と『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。『少女は卒業しない』は朝井リョウの代表作。『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。

『少女は卒業しない』と『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。『少女は卒業しない』は朝井リョウの代表作。『一年一組せんせいあのね』は朝井リョウの代表作。

『書誌情報』：『わたしの幸せな結婚』①～⑦ 顎木あくみ作／富士見文庫 ①～④ 六二〇円 ⑤～⑥ 六四〇円 ⑦ 六六〇円

『白鍵と黒鍵の間に』 南博（ジャズピアノリスト）著／小学館文庫 七三〇円 ・『少女は卒業しない』 朝井リョウ著／集英社文庫

『カケオくん』 36 黒柳徹子 トットちゃん

※価格は本体価格です。

という作品が度々出てきます。近年一話目から自分がハマることはなかったもので、そういう作品に出会えて嬉しい一年になりました。

⑧



## かつて子供だったあなたへ

子供たちは素直で、疑問がいっぱい。そして、時に残酷。大人の理不尽に真っ向から疑問を投げかける。私たちもかつては子供だった

のに、いつから空気を読んだり言いたい事を飲み込んだりするようになったのだろうか。

今年もこの中田図書新聞で読んでいただきたい児童書を紹介してきた。二〇二三年の最後に、あのね帳から一年生のことばを選んだ、ヨシタケシンスケが絵を描いた『一年一組せんせいあのね』をおすすめしたい。

一年生のことばには何ら曇りがたい。「わたしにてつぼうを十回させます。せんせいはいっかいもやりません」など、攻めるような言い方でない事が余計に大人の胸に突き刺さる。他にも詩のようなことばや、先生に言った事を知ったらお母さんが慌てるだろうなと思うものが満載だ。

私も時に、子供に返りキラキラした瞳で「それはどういうことでしょう」などと伝えてみたいけれど、大人の姿ではもはや説得力もなく、今日も大きく息を吸い込んでグツと何かを飲み込むのだろう。そんな時にもこの本は、童心を思い出させて心を少しでもかろやかにしてくれる。

⑧

